

祖母の「生きる」を支える税金

千葉市立加曽利中学校3年 宮前 奈央

この夏の参議院選挙では、各党がさまざまな減税策を掲げ、物価高が続く中で「誰がどれだけ税を負担するか」が大きな争点の一つとなっていた。確かに、主食の米も野菜も驚くほど値上がりし、「それほど贅沢な暮らしをしているわけではないのに、常に余裕がない……」という生活を送っている家庭が多いと、ニュースなどで耳にすることがたびたびある。税金を払う額が少しでも減ったら、どの家庭も助かるし喜ぶに決まっている。家計が苦しく、生活に余裕がないとき、「税金=悪者」という感情が生まれるのは自然なことだと思うが、本当に税金は悪者で、排除してもよいものなのだろうかと考えていたとき、ふと、祖母の家を思い出した。

祖母の家には、玄関からリビング、寝室、お風呂、トイレ、祖母が使う全ての部屋に手すりが付き、玄関やお風呂には介護用の椅子が置かれている。これらは、祖母が病気になってから設置したものだ。祖母は、脳出血で入院をしていた四か月の間、少しでも早く家に帰ることを夢見ながら、毎日厳しいリハビリをこなしていた。しかし、心の中では、「帰っても、以前のままの家では今まで通りの生活をすることは難しい。そうなると、もう家には戻れないかもしれない……」と常に不安に思っていたそうだ。だから、数か月ぶりに帰ってきた家の、自分の生活動線につけられたいくつもの手すりを見たときには、「私は戻ってきてよかったんだ」と涙を流していた。このときの心からほつとしたような祖母の顔は、私は今でも忘れられない。そして、これらのおかげで、退院後すぐから今まで、祖母は自分の家で自分の力で動くことができている。このとき、祖母の「生きる」を支えたものは、介護保険や自治体の助成金という形の私たちが納めた税金である。

税金が大切なことが分かっていても、それが何に使われているかが見えないと、ただ取られているだけで損をしたような気分になるかもしれない。しかし、私は、税金は、高齢者や病気の人を支える医療、福祉の分野でも大きな役割を果たしていることを、祖母のことで実感することができた。高齢化が進む中、自分の家族や地域の高齢者が安全に安心して暮らせるのは、私たちが納めた税金による支えがあるからだ。

三年後、私は成人して選挙権を得る。多くの問題を抱えた社会において、投票を通じて、税の使い道を決める大切な一票を投じられるようになるのだ。祖母は今も税金に支えられながら、生き生きと一日一日を大切に生きている。私もきちんと前を向き、今から介護や福祉、教育、その他さまざまな分野における税の役割を学び、数年後、「税金=悪者」という単純な見方ではなく、「どのように使えば社会がよくなるか」、「誰が誰をどのように支えるか」、「将来に向けて何を残すのか」をしっかりと考えられる大人になっていきたい。